

戦争を知らない世代が大半を占める今、戦争の記憶をどう継承し、未来の平和につなげていくのか——。
慰霊と語り継ぎに取り組む遺族会の会長と、記録を通して伝える映画制作者、それぞれの視点からお話を伺いました。

遺族会の活動

北上市遺族会の会長に就任してから、今年で7年目になります。遺族会は、毎年の慰霊祭を開いたり、地区ごとに平和についての講話を行ったり、平和行事にも参加しています。慰霊と語り継ぎが、私たちの大事な役割です。

平和への思い

戦後80年、よくここまで戦争をせずにこれたと思います。日本はこれからも戦争をしない国であり続けるべきです。何年経っても、それは変わりません。

平和を守るために今できること

「過去の悲惨さを語り継ぐ」とそれ

戦争を知らない世代に 平和の尊さを伝えたい



高橋 成治 さん(81歳・下江釣子)
北上市遺族会会長、江釣子遺族会会長

が、平和を守るために私たちにできることです。

記憶の継承

戦争体験者の言葉には説得力がありますが、語り継げる時間は限られています。遺族会青年部や女性部の育成が課題で、仲間を増やすことが今後の鍵です。

若い世代へ

今、平和であることを当たり前と思わないでほしいです。世界では今も戦争が続いている国があります。日本も、いつ平和でなくなるかわからない。だからこそ、平和の尊さをしっかりと知ってほしいです。

記録を通して

戦争の記憶を未来へ伝えたい



都鳥 拓也 さん(42歳・鬼柳町)・伸也 さん(同)
ドキュメンタリー映画「戦争の足跡を追って
北上・和賀の十五年戦争」を制作

戦争をテーマにした映画の制作

祖父が軍事工場の国産軽銀岩手工場で働いていたことから、幼い頃から戦争の話を聞いて育ちました。祖父が90歳を超えたとき、「今のうちに記録しなければ」と感じたことが制作のきっかけです。また、沖縄での映画制作中、高校生の「地元の戦争も見つめるべき」という言葉に背中を押され、北上市の戦争をテーマにした映画を作る決意をしました。

映像を通じて伝えたいこと

戦争から80年が経ち、戦争の実感が薄れてきています。若い世代が当時の状況や被害を知り、なぜ戦争のない社

会を求めたのかを理解することが、今こそ必要だと感じています。

撮影中に印象に残ったエピソード

市内だけでも戦争を語る財産がこんなにたくさん残っているんだと実感しました。一方で、証言者の高齢化が進み、話を聞ける機会が限られてきていることに、記録の難しさも痛感しました。

平和を守るために今できること

戦争という出来事に興味を持ち、自ら学びたいと思ってもらうことです。映画はそのきっかけになります。未来を見つめるためには、過去から学ぶことが大切だと感じています。

特集 終戦80年

あの日を知る — 今、平和を考える

今年、終戦から80年という節目の年を迎えました。

戦争を体験した世代が少なくなっていく中で、戦争の記憶や平和の大切さを次の世代へ伝えていくことが、ますます重要になっていきます。平和の大切さを知ることは、これからの時代を生きる人たちが、争いのない社会を築いていくための第一歩です。

私たちのまわりにも、戦争の記録や語り継がれてきた体験が残されています。それらは、遠い過去の出来事ではなく、今を生きる私たちにもつながる歴史です。

本特集では、戦争の記憶を語り継ぐ人々の声や地域に残る資料、そしてそれを受け止めた若い世代の声を紹介します。

それぞれの立場から語られる平和への思いを通して、平和のバトンを未来へつないでいきましょう。

展示を通して学生たちが受け取った思い——。
平和を願う気持ちは、次の世代へ受け継がれています。

平和を守る気持ちを広げる

鉄かぶとに大きな穴が空いているのを見て、すごく怖くなりました。撃たれて亡くなった人もいたんだと思うと、戦争の恐ろしさが強く伝わってきました。見学する前は、戦争は昔のことで自分には関係ないと思っていましたが、見学をして「今の平和は当たり前じゃない」と気付きました。

これからは、戦争の悲しさを忘れずに、平和な世の中を大切にしていきたいです。友達や家族とも話す機会を作って、平和を守る気持ちをさらに広げていけたらと思います。



中野 澪 さん(和賀東中1年)

戦争を知るきっかけを作る

展示されている服や道具が使い込まれている様子が驚きました。どんなことがあったらこんな風になるのかと想像して、とても怖くなりました。戦争については知っていたけれど、藤根でもそんなことがあったとは知らず、すごく驚きました。

見学した後は、自分はこれからどうすべきか、ということまで考えるようになりました。大人になったら、子どもたちに戦争のことを伝えていくことが大切だと思います。自分も小さい頃は何かを知らなかったからこそ、知るきっかけを作っていきたいです。



今野 太葵 さん(和賀東中1年)

今ある日常が

どれほど尊いものか

私たち一人一人が

平和の価値をもう一度、
考えてみませんか

軍事郵便が語る戦争

高橋峯次郎氏に送られた軍事郵便の一部を紹介します。故郷を思う気持ちや先生への感謝が伝わった手紙の中には、戦況の厳しさや過酷な訓練の様子が垣間見えるものもあり、当時の兵士たちの心情が伝わってきます。

厳しい戦闘

北支下元部隊中村静部隊岩淵隊 石川庄七

先生暫く御無沙汰致しました 其の後御変りありませんか 定めし御壮健にて銃後のため一生懸命御指揮あらせられし事と察ます。降口小生儀は先月九日、順徳市出発山西に向かって前進を開始。途中度支以来の頑強なる敵をと十数回の戦闘して百余里、手漢線の臨口に更(る)。二月二十七日城を占領。只今、此処の警備に従事致して居ります。ご安心くださいませ。

今度の戦闘、山中の故、仲々敵陣も頑強で友軍の損害も相当あり 又敵の損害は死者のみ一万近と言う事、尚分捕品、多大なものでした。私等も戦う度毎に 今度は戦死か戦死かと思ふた事も、数知りません。特に路安城占領の時は、吾等隊は決死隊となり工兵一小隊と共に城門打破り 突撃せし時などは小隊一同皆決死の覚悟その姿、勇々たるものでした。

後備兵としては仲々骨の折れる戦闘、追撃、又戦闘夜行軍、敵も四万以上と言うが 所持品を投げて退撃するを見れば仲々の苦戦を物語って居ります。御陰を以て無事御奉公申し上げました事もみなさまの御陰と感謝致して居ります。…

▼解説

石川庄七さんは、北支(中国北部)での進軍中、山中で十数回にわたる激しい戦闘を経験しました。特に「路安城」では決死隊として突撃し、「今度こそ戦死か」と何度も思うような戦いだったと記しています。「今こうして生きているのは、皆さまのおかげ」と感謝の言葉を記し、無事を知らせています。

資料提供: 平和記念展示館

記憶の継承と今後の課題

戦争体験者が少なくなる中、記憶の継承を続けていくことには不安もあります。動画など、時代に合った方法で伝えていくことも必要だと実感しています。「今できることを、できる限り積極的に伝えていく」そんな思いで活動を続けています。

今こそ平和を考えるとき

日常の生活が当たり前で、大きな努力が必要で、戦後80年という節目を迎えた今、ぜひ同館を訪れ、改めて平和の尊さについて深く考えてみましょう。

きたかみ

北上平和記念展示館

市内の戦争の記録に目を向けて—
7,000通の軍事郵便と戦時中の資料を展示

和賀町藤根にある同館では、青年学校の指導員だった高橋峯次郎氏宛てに、戦地の教え子から届いた約7,000通の軍事郵便をはじめ、同地区に残る戦時資料約400点を展示しています。一農村の教師と教え子たちの交流を通して、歴史の真実を後世に正しく伝え、世界の恒久平和を祈念する内容が展示されています。



故 高橋 峯次郎 氏

■開館日…4月1日～12月25日10時～16時(毎週月・火曜日は休館、祝日の場合は翌日休館)
■入館料…無料(団体見学・体験学習は要予約)
■問い合わせ…0197-73-5876



▲戦時中の軍服や穴の空いた鉄カブトなど、当時の現実を伝える品々が展示



▲藤根国民学校講堂で行われた、戦没者を弔う葬儀「村葬」

◀岩手陸軍(後藤野)飛行場のジオラマ。後藤野は土地が広く、地形が平らで飛行場にふさわしい場所として設置された。多くの特攻隊員がこの地から飛び立った



▲藤根村出身の特攻隊員の遺書。敵の船に体当たりし、国を守ることにしたことや、親孝行できなかった思いが伝わっている

伝えることで、記憶は生き続ける
それが、平和への第一歩に

展示館の役割と展示の背景

戦争の様子を伝える場として開館から24年目を迎えました。戦争の様子が具体的に伝わるよう、自分自身も当時の情景を思い浮かべながら案内し、戦争を知ってもらいたいという思いで活動しています。

伝え方の工夫

軍服や小銃を実際に手に取ってもらうなど、体験を通じて兵士の苦勞を想像してもらう工夫をしています。また、展示されている手紙の背景や当時の状況が伝わるように説明し、戦争の実像に触れてもらえるよう努めています。

来館者の反応

短時間の見学でも、特に子どもたちは想像を膨らませ、戦争の悲惨さを感じ取ってくれています。表情から、悲しみや大変さを受け止めている様子が伝わってきました。



高橋 源英 さん(88歳・和賀町長沼)
同館元館長、現ボランティア学芸員